

長岡造形大学
地域協創センター
文化振興センター

地域と協働し、地域を創る

20
21

地域協創センター 文化振興センター について

各センターは、本学の社会連携ポリシーに基づき、広い領域に関わるデザインの特性と教育研究力を活かして地域社会に新たな価値を創出するとともに、教育研究活動の成果を還元することによって地域に貢献することを目的に活動しています。

地域のデザインニーズを一元的に受け止め、有機的なプラットフォームとして教育研究との結びつきを最適化し、それらは様々な活動に実を結んでいます。

事業・活動等の実施にあたっては大学全体をあげて取り組み、そのコーディネーター役として専任教員であるセンター長と事務局を配置しています。

地域社会をデザインの実践的な学びの場とし、企業や自治体・コミュニティ等と協働した課題解決への取り組みを、「社会人基礎力」「構想力」「創造力」を育むアクティブラーニングとして、カリキュラムへの積極的な導入を図っています。



主な取り組みについて



産学官連携・地域社会との連携

デザイン研究開発

本学教員及び学生の研究力や人的資源を活かし、企業や自治体等と連携したデザイン研究開発を推進します。

まちづくり・環境づくりプロジェクト

企業や自治体、コミュニティ等と連携したデザインプロジェクトや地域イベントに、地域協創演習やボランティア実習の授業等を通じて取り組み、地域のまちづくり、環境づくりを推進します。

知的財産の管理活用

教育研究活動から生み出される特許や意匠権などを積極的に保護し、活用に取り組んでいます。



市民の生涯学習・文化活動の支援

市民工房

一般の方々を対象に、ものづくりの楽しさと創造の喜びを本格的な工房で体験できる多彩な講座を提供しています。

こどもものづくり大学校

小学生を対象に、ものづくりや遊びを通して、豊かな感性と創造力を育む場を提供しています。

まちなかキャンパス長岡

市民の方々の“学びと交流の拠点”として、学びを通じて世代や地域を越えた交流を盛んにすることを目的に、市内の4大学1高専が長岡市と連携して企画運営しています。

美術・デザイン勉強会

中学生・高校生を対象に、易しい手法で美術・デザインの専門性を体験する勉強会を行っています。

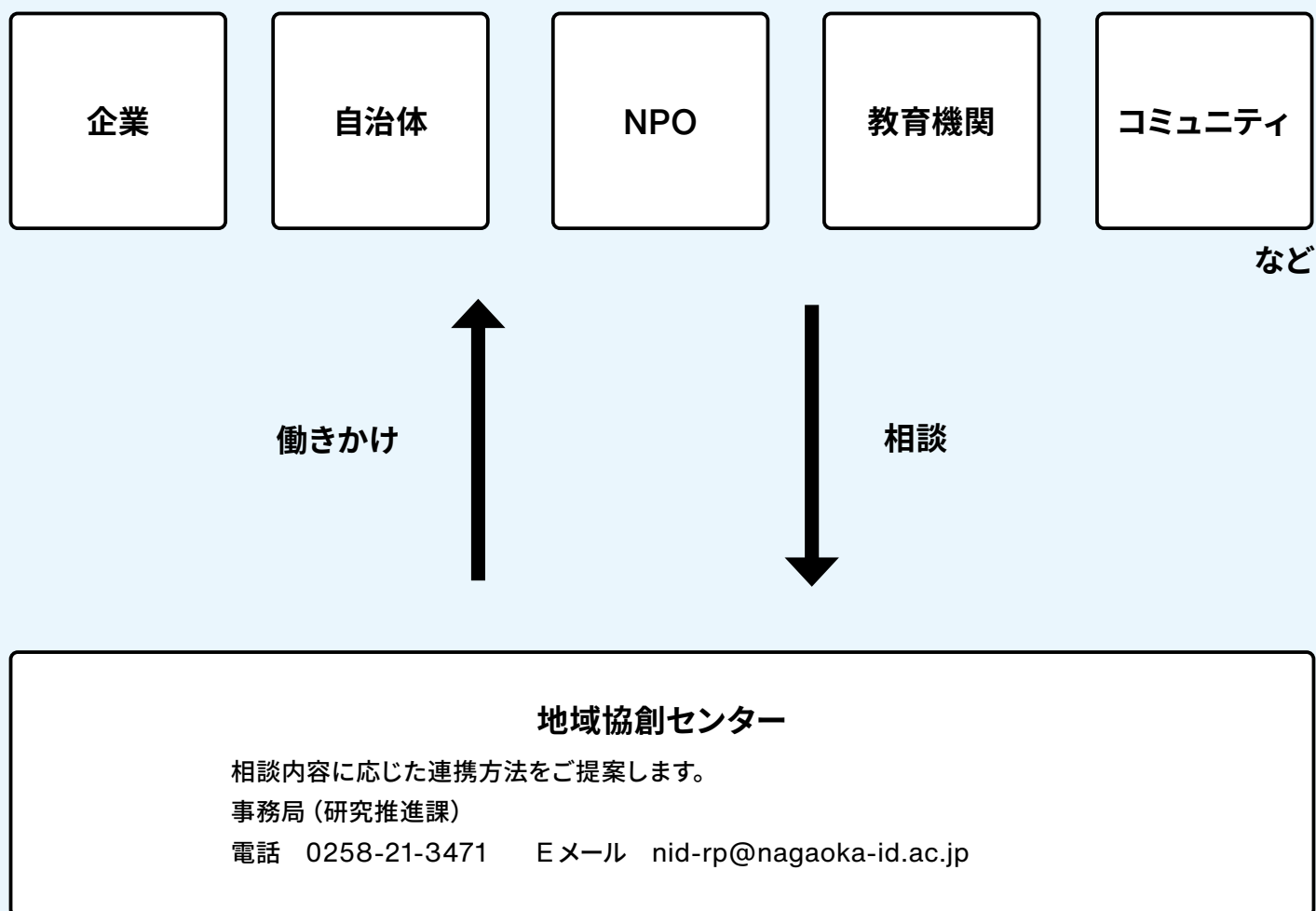
公開講座・講義

各分野で実践的に活躍されている方を講師としてお招きする授業「特別講義」等を一般公開しています。

施設の開放

図書館、ギャラリー、NIDホール、講義室、緑地・庭園等本学施設を市民のみなさんに開放しています。

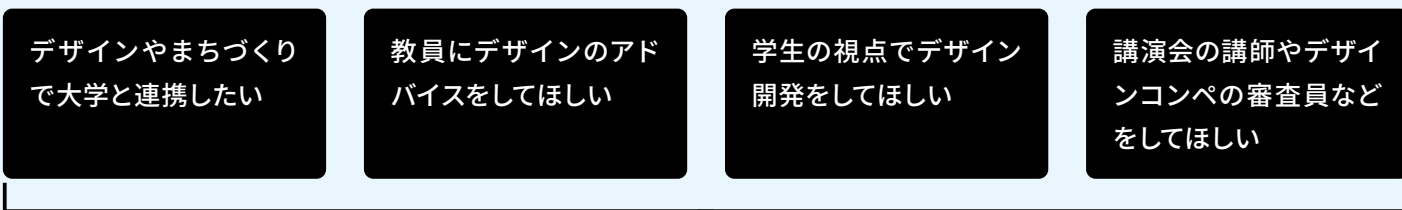
🗨 センターへのご相談について



◎知的財産について

本学では教員・学生の知的財産の保護に取り組んでいます。連携プロジェクト・授業等で知的財産が創出される場合、権利の帰属等に関して、契約書の取り交わしを行う等のご相談をさせていただきます。

ご相談例



長岡造形大学ホームページから「依頼・相談申請書」をダウンロードし、必要事項を記入の上、地域協創センター事務局へ提出

打合せ
必要に応じて直接打合せを行います。関係する教員とスタッフで詳しい内容をお聞きし、ご相談内容に最も適した連携方法をご提案します。

デザイン研究開発
教員の研究分野について、研究費を受け入れて受託研究や共同研究を行っています。

地域協創演習等の授業
(学生を主体とした授業での取り組み)
学生にとって教育効果が高いと判断する場合に、授業内で教員が指導のもと学生が課題解決等に取り組みます。
※知的財産に関わる契約書等の取り交わしをする場合があります

講師派遣等
講演会やセミナー、デザイン審査等に専門家の知見を提供しています。

※ご相談に対する回答までには約1か月程度、業務開始までには約2～6か月程度かかります。
教員や学生は授業・その他学事が優先となりますので、予めご了承ください。

デザインやアートを学びたい
(個人の方)

学生アルバイト・ボランティアを募集したい

学生をインターンシップで受け入れたい

大学既存プログラムの紹介
市民工房
(一般の方を対象にしたものづくり講座)
こどもものづくり大学校
(小学校3～6年生を対象にしたものづくり講座)
まちなかキャンパス
(長岡市・長岡市内4大学1高専による各種講座を開催)

学生アルバイト・ボランティアの募集については、学生支援課をご紹介します。本学様式の「アルバイト求人票」は、本学ホームページからダウンロードすることができます。

インターンシップについては、学生への就職支援を行っているキャリアデザインセンターをご紹介します。

産学官連携・地域社会との連携

デザイン研究開発	8 - 26
知的財産の管理・活用	27 - 28
地域協創演習	29 - 33
ボランティア実習	34 - 35
地域特別プロジェクト演習	36 - 38
NaDeC 構想の推進とその拠点 NaDeC BASE の運用	40
長岡芸術工事中 2020	41

市民の生涯学習・文化活動の支援

市民工房	43
こどもものづくり大学校	43
長岡造形大学 美術・デザイン勉強会	44
長岡市中学校美術部作品展	44
特別講義・出張講義・実技講座	45
亀倉雄策賞受賞記念展覧会	45
まちなかキャンパス長岡	46
夢づくり工房 in 長岡造形大学	46

産学官連携・
地域社会との連携

デザイン研究開発

行政や企業等から相談をいただいた様々な課題に対し、委託を受けて本学教員と学生が解決に取り組んでいます。デザインの専門大学としてより高い価値、新しい価値の創出につながるような提案を目指すことで、地域社会と本学の教育研究が相互に良い関係を築けるよう努めています。

プロジェクト名：

旧機那サフラン酒本舗米蔵の内装デザインアドバイス業務

連携先：ミライ発酵本舗株式会社

実施期間：令和2年5月18日～令和2年3月31日

プロジェクト主査：金澤 孝和（プロダクトデザイン学科 准教授）

1. プロジェクト概要

本プロジェクトは、長岡市が醸造のまち摂田屋に立地する旧機那サフラン酒本舗を情報発信・交流拠点施設として活用するため、建物改修等の整備事業の第一号としてオープンする米蔵の什器含めた内装デザインアドバイスを期待されて受託した業務である。長岡市は管理運営を民間に委ねる方針で、プロポーザルによりその委託先をミライ発酵本舗に選定した。よって連携先はミライ発酵本舗となるが、建物改修全体の計画に関する長岡市の意図を読み取る必要もあった。

2. 実施状況

2-1 現状把握

米蔵改修の建築設計は、長岡市からの委託により早稲田大学教授の古谷誠章先生率いる NASCA が担当している。元々の米蔵は昭和初期に建てたとされ、間口7間、奥行5間に3間の下屋が付属した土蔵であった。下屋は壁に囲まれ暗く狭かったが、改修後は下屋部分を一体化させ、かつ前面をガラスにしたオープンで明るい空間へと変貌させている。

内部は軽飲食の提供ができるよう、小さなキッチン設備を持つ箱形状の造作や、イベント時に形状を変えるインフォメーションカウンターが計画されていた。その配置は、窓から見える庭との一体感や、回遊導線を考慮して角度がつけられており、物販や飲食、イベントで使われる什器類とその配置にもその配慮が求められた。改修途中の現場と図面をみた率直な感想は良くも悪くも「きれい」であった。新しい米蔵は当面、案内所（事務所）機能・軽飲食・物販・展示・イベントスペース等多目的に使われる。将来的には、他エリア改修がされていくことに伴い、段階的に役割が変化する。その変化に対応する配慮も重要な任務である。

軽飲食の提供は SUZU GROUP（オーナーシェフ鈴木将氏）が出店することで決まっています、当初は設備及びオペレーション等の理由からカレーを提供するという計画を聞いていた。キッチンスペースが狭く、収納もほぼないという問題を緩和するアイデアが求められた。また、飲食スペースは各種イベントや、企画展示等の複合用途対応が必要であり、テーブル（甲板）の形状や寸法、食器類との相性、可搬性、収納性など要求が複合的にからみあっているため、それらを考慮した最適解を導き出す必要があった。

物販スペースに関しては、本業務着手時点で商品展開詳細

が確定していなかったため、提案ベースで話をする事ができた。酒販することは決まっており、免許制度の都合、飲食スペースと物販エリアを明確に分けることが求められた。

その他、長岡技術科学大学の小笠原研究室、絵本作家の松岡達英さん、イラストレーターの秋山孝さんのスペースなどの計画があることがヒアリングできたが、未確定要素が多く手探りで作業になることが予見された。

2-2 方針確認

現状把握段階でのヒアリングで、関係者それぞれの熱い想いを感じることができた。しかし方向性やスピード感、描いている将来像などにそれぞれ温度差を感じたため、作業に入る前に、米蔵のしつらひに関する 이슈を集めて整理し、まずはそれを提示することとした。生活者と旅行者の関係性や来訪者の居場所・居心地に関することなどの具体的な状況を例示して共感を求めた。米蔵は時限的に役割を変えることが決まっていたため、流行のワードも少し取り入れて新しさを感じてもらえるようプレゼンを演出した。

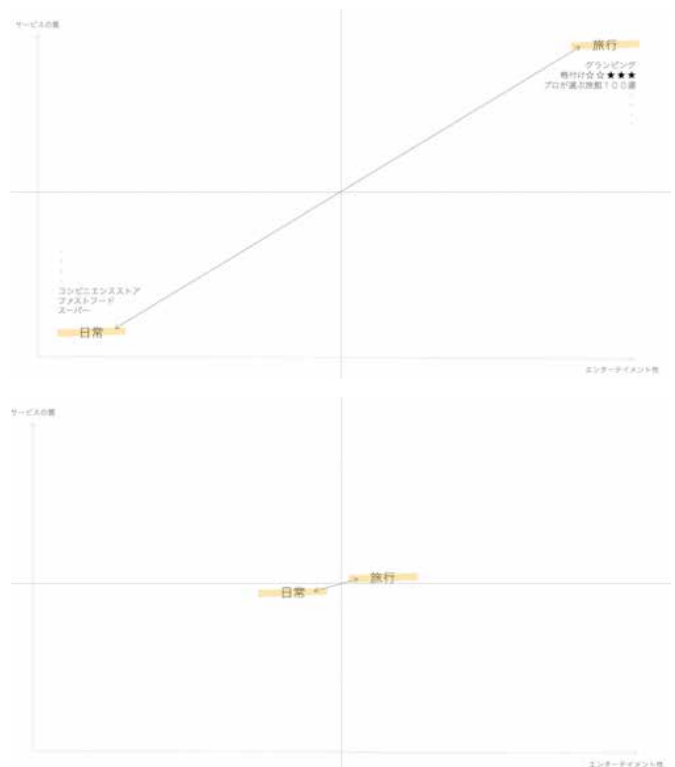


図) プレゼン資料抜粋。サービスの質とエンターテインメント性を軸に生活者と旅行者の関係性をマッピング

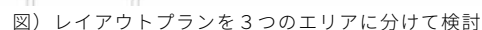
※所属等はプロジェクト当時のもの

目的の曖昧化
お互いが二次目的になれる関係性

	場所	と	飲食
	ラーメン店	と	ラーメン
	イートインスペース	と	パン
何を探してる?	本屋	と	コーヒー
動物とのふれあい?	牧場	と	ソフトクリーム
	銭湯	と	牛乳

最終的には、おむすび(と味噌汁 BAR)を提供してテイクアウトも可能な営業をする方向となった。案内所機能→おむすびテイクアウトで街歩きという関係構築や、元米蔵でおむすびを提供するというストーリーも付加できること、具材に変化をつけるのが比較的容易で、米蔵で企画される各種イベントとのリンクしてメニュー開発ができることなど、互いが二次目的になれるアイデアが出された。さらには、食事時間帯に縛られず間食需要にも対応できることもメリットとしてあげられた。

ここでは簡単にそれぞれについて触れる。



これらを実現するしつらいのアイデアを提示した。

A photograph of a traditional Japanese building, likely a gate or entrance to a garden. It features a dark tiled roof and a white lattice balcony. The building is surrounded by trees and a dirt path.

建物最奥の壁に囲まれたスペースには、自然に全体を見回すフリができるように、選ぶフリができるようフリーペーパー置き場を設定した。紙ものは、空きスペースがあれば寂しく感じ、増え続ければ、空間を雑多な印象へと変えるので、必要量に応じて調整でき、かつ統一感をもたせるために、フックで取り外し可能な、蔵の形をしたホルダーを新規で制作した。



図) 蔵型のフリーペーパーホルダー設置案（最大量）



図) 蔵型のフリーペーパーホルダー試作



図) 県内観光施設のフリーペーパーが置かれた状況
ラックのスペースが足りなくなり机にまで置かれる。

物販スペースの展示什器は、米蔵が今後用途が変化をしていくことを考慮して、レイアウト変更に対応しやすい置家具での提案をした。現状把握の項で建物がきれいになった感想を記したが、什器で少し時代を巻き戻すことはできないかを検討し、過去に実際に使われていたであろう、サフラン酒の木箱を道具蔵2階から発掘して使う案を模索した。什器本体は、酒販に耐える強度を考慮してアイアンを使い、棚板にはミライ発酵本舗株式会社が合言葉としている「まざる、つながら、うまれる」の、まざる前状態を想起させるような合板の積層にカラフルな紙が使われるペーパーウッドを使った。



図) 過去に使われていたのであろうサフラン酒木箱



図) 屋根の勾配を模した背の高い棚什器

側面からみたアイロンの本体フレームは、屋根の勾配を模したかたちをしており、可愛らしさと温かみを空間に与えている。カウンター内部からの店員目線をやんわりと遮る高さの棚什器と、ウィンドウ面や島展示、回遊動線・目線を遮りたくない場面では低い棚什器を選択できるように2パターン提案した。



図) ウィンドウ面や島展示などに背の低い棚什器

また、その意匠に合わせて、物販レジやイベント時のモグリなどに対応するようワゴンタイプのカウンターも提案している。

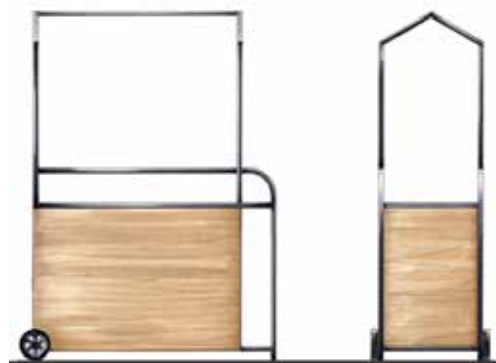


図) 意匠を棚什器と合わせたワゴンカウンター

その他、収納が少ないという要望に応えるべく、階段状のオープンラックも提案した。グリッド外形のモジュールを380ミリとして1段では床座のテーブルがわりや腰掛ける高さ、2段760ミリで椅子座のテーブルがわりとして、3段1140ミリで少し高めのカウンターとしても機能する。当初は床座、椅子座で子供に絵本を読み聞かせることを想定していたが、実際には小笠原研究室の顕微鏡を置く台としての使われ方や、新型コロナウイルス対策のアルコール消毒液を入り口で提供するカウンターとして使われている。変化する米蔵の使われ方に対応できるようにという思いがあつての設計だが、最初から想定外の使われ方をしている。その意味で設計の意図通りとも言えるだろう。

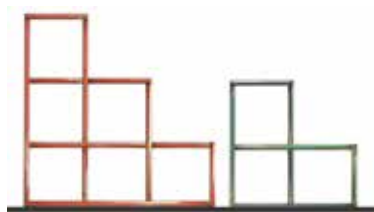


図) グリッド外形ユニット寸法：380mm



図) 組み合わせで使い方に变化

B.『じぶんで居場所をつくる』は、近づかれると不快に思う空間の形や距離は個人差があるため、自分でコントロールできるような工夫があると安心ではないかという仮説をたて、アイデア展開した。

メイン空間では、講演やコンサートなどのイベントに対応するため椅子が必要になること、その椅子は通常時や展示会などには適宜配置して、場合によっては片付ける必要があること、その収納スペースは小上がり下部のごく限られた空間となること、などが条件にあげられた。そのような条件から、元々の設計計画案では、パイプ椅子となっていた。しかし背付きの椅子は前後の向きがはっきりして、そのベクトルが空間の対流導線を作り出すこともあって、しっかりとした配置計画をたてなければならず、仮説との相性がわるくなるなど感じた。鏡面金属の無機質な素材感も空間づくりに影響する恐れがあった。可変式のインフォメーションカウンター

に関しては、米蔵が将来、段階的に使途が変化することや多目的に使われることなどを考えるとどうなのかをより具体的にヒアリングして、結果的に別案を提示することとした。

まず、インフォメーションは対面での接客とデジタルサイネージで役割を分担することを提案した。観光の訪問者は、事前あるいは現場でスマートフォン活用する観光のICT化が進んでいる。現地での情報発信基地の役割は「情報の答え合わせ ≧ 情報探し」となっているため、リアルタイムに更新されるサイネージが現地にあることのメリットは受発信者双方感じるができるだろう。設置は回遊導線の転回点になる場所として、イベント時には移設する仕組みも考える必要があった。意匠は平面図で六角形の3面にモニターを3枚縦画面で設置する案で、それぞれの画面は下部のボックス内端末に接続・収納する。本体外面は鉄板に黒板塗装を施した。塗装部には、チョークで直接情報を記入したり、マグネットを使って掲示したり、アナログ的な手法も許容する。将来的には、訪問者が現地で収集した情報をこの端末を利用して共有することなども期待している。



図) 縦型モニター3画面のデジタルサイネージ本体外面は鉄板に黒板塗装を施した



図) デジタルサイネージが回遊導線の転回点となる

椅子は背のない、折りたたみのスツールを提案した。脚部にはナラ無垢材を使用して、座面にはカラフルなキャンパス地（富士金梅）が使用されている。整然と並べるとベクトルが生まれるが、単独で置くと方向性が曖昧になる。座る人の向きでそれが決まる。



図) 参照 https://sugikojo.com/wp2/wp-content/uploads/2020/05/oritatami_79-1000x663.jpg
その他、脚部が展示台と共用でき、スタッキングも可能なテーブルも提案したが、予算の都合か制作には到らなかった。

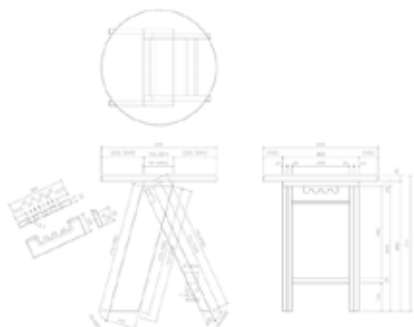


図) 円形テーブル案 制作まで至らなかった

最後にC.『目的を補い合う』であるが、前項2-2で互いに二次目的になれる関係をつくるべく提供メニューをカレーからおむすびへと変えた。それに伴いサイン計画などを進める必要があったが、関係者がそれぞれ想っていることが違う恐れがあったため、今一度ターゲット設定の考え方などを共有した。施設の役割から、老若男女マルチターゲットにならざるを得ないのだが、とくに「幼児とその親」に焦点をあてた。幼児とすることで、安全性や視認性への配慮も必用となる他、祖父母の層もサブターゲットとなり得る。両者を連れてくるのが、子の親であり祖父母の娘、つまり30代女性である。ここがコアターゲットとなる。今回はこのターゲットに向けたデザインを多く手掛け、鈴木将氏とも仕事をしていた。新潟在住デザイナーのイナムラシンヤ氏とコンタクトをとった。現場ロケハンの前に、方針の説明や関係者の想いなどを伝え、イナムラ氏のこれまでの仕事への考え方もお聞き

した。コロナ渦で対面でのコミュニケーションがとれず、想いが共有できるか不安であったが、遠隔でも数回の打ち合わせで状況をしっかりと把握してくれ、安心してお願いすることができた。

提案された案は、想像していたよりも大胆・斬新であった。ミライ発酵本舗でも共有してもらった際も最初は斬新さに驚いたという反応であったが、時間をおいてジワジワと納得していくようであった。その様子は、時間をかけて発酵が進んでいくようで、まさにこの場に相応しい提案であったと感じることができた。



図) イナムラ氏からの初期案（CG）

イナムラ氏には、施設ロゴデザインや入口ウィンドウ面のインフォメーションも提案してもらっている。

3. まとめ

今回の業務は、内装デザインのアドバイスということであったが、実際は熱い思いをもった関係者の方々の温度調整的な役割でもあったのかなと感じている。コロナ渦でコミュニケーションが取りづらい中、必要な情報が必要なタイミングで手に入らないもどかしさも感じて、提案が後手になるという状況もあったが、なんとかオープンに間に合わせることができた。ご協力いただいた皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。今後も続々と改修が続くと聞いている。もしまたお声がけもらえたら微力ながら協力をしていきたい。

プロジェクト名：

長岡電気工事協同組合ロゴマークデザイン開発

連携先：長岡電気工事協同組合

実施期間：令和2年7月1日～令和3年3月31日

プロジェクト主査：金 峯 洙（視覚デザイン学科 助教）

プロジェクトメンバー：青木 彩夏、畔上 祐香、アタナシア・ソエディラ、田中 雄大、宮坂 和葵（視覚デザイン学科）

プロジェクト協力：内山 健史

1. はじめに

令和7年度に長岡電気工事協同組合（以下、組合）は創立から50周年を迎える。それを記念し近年は組合として様々な事業を計画・実施しているが、今まで正式なロゴマークがなかったことで、組合青年部と本学とが連携し、ロゴマークの制作プロジェクトを共同研究として行うこととなった。

2. 長岡電気工事協同組合の概要

長岡電気工事協同組合は、長岡市及び見附市を区域とする電気工事業者の経営の安定・発展を目的として昭和50年3月に設立された。また、電気工事業者への教育及び情報提供にも注力し、工事の安全性の向上にも寄与している。



長岡電気工事協同組合事務所の全景
（写真提供：長岡電気工事協同組合）

3. ロゴマーク決定までのプロセス

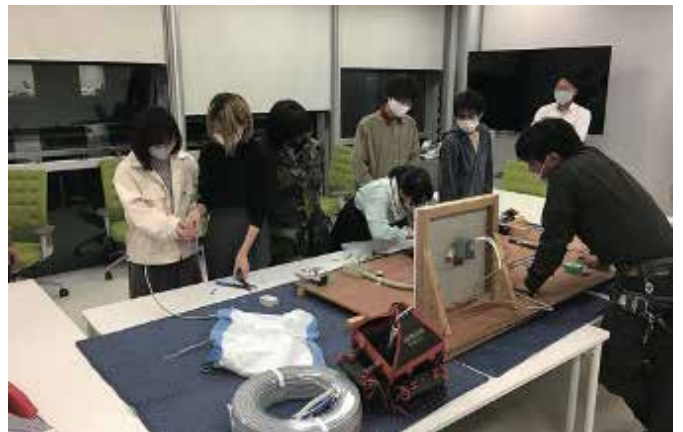
今回のプロジェクトでは、視覚デザイン学科の教員である金がアートディレクターを務め、制作チームとして視覚デザイン学科3年生5人が参加した。多数の学生を参加させた理由としては、学内の授業では体験が難しい実践的なデザインプロジェクトの経験を積んでもらうことはもちろん、学生メンバー全員が新潟県外出身であることで、長岡電気工事協同組合を中心に長岡市の電気関連産業やそれを支える企業や社会組織の全般を学んでもらい、また、デザインの力で地域社会に貢献するきっかけとなることも目的の一つとして考え

た。また、プロジェクトを通して学生たちの若く新鮮なアイデア・エネルギーを最大限活用することで、ロゴマークを制作するだけでなく地域社会に活力を与えることも期待した。

プロジェクト開始からロゴマーク決定までのプロセスは次のとおりである。

①長岡電気工事協同組合との初打ち合わせ（令和2年4月）

②模擬盤デモンストレーション（令和2年10月）



模擬盤デモンストレーションの様子（会場：長岡造形大学）

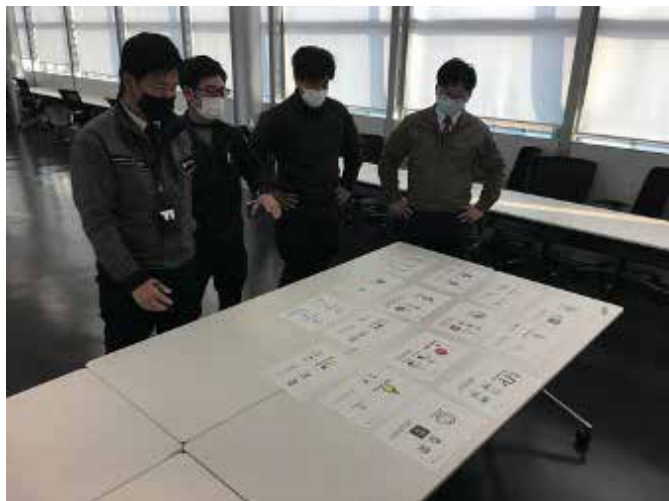
③電気工事現場見学（令和2年11月）



長岡駅前のイルミネーション設営

※所属等はプロジェクト当時のもの

④中間選考会（令和3年3月）



中間報告会の様子（会場：長岡造形大学）

⑤ロゴマークアンケート実施（令和3年3月）

- ・組合の関係者を対象にWEB投票（参加者59人）
- ・アンケート期間：3月18日～24日

⑥最終選考会（令和3年3月）

⑦ロゴマーク調整作業（令和3年3月）

⑧ロゴマーク使用マニュアル作成（令和3年3月）

4. ロゴマークのデザインについて

今回のプロジェクトは、令和7年に組合は創立から50周年を迎え、近年組合として様々な事業を計画・実施している中で、今の雰囲気を持続しながら更に盛り上げたい思いがあったため、“長岡電気工事協同組合らしさ”を表現し且つ地域の方々に愛されるデザインを目指した。

デザインのコンセプトは、長岡電気工事協同組合略したNDKをお家に見立て、黄色等ワンポイント色を入れる事で生活をつなぐ、お家に灯った電気を表現した。地域に「暖かな電気」を通して貢献している長岡電気工事関連会社の集まりである事が伝わるデザインとして考えた。地域の電気工事にかけた人々の思いや努力を「NDK ブルー」（C100%, M95%, Y30%, K0%）、「NDK イエロー」（C10%,

M40%, Y100%, K0%）で表現した。



長岡電気工事協同組合

最終決定案

5. 今後の展開

今後ポスターやチラシを始め各種記念グッズなどにこのロゴマークが活用される予定である。

組合50周年になる令和7年までは約4年あることを強く意識し、これから新ロゴマークを積極的にアピールすることを期待する。

6. 最後に

今回のプロジェクトは、地域の文化を理解しつつ実践的なデザインワークとして行ったため、プロジェクトに参加した学生たちには非常に貴重な経験となったと思う。また、投票を通して組合の関係者からの様々な意見を確認することができ、プロジェクトとしても非常に大きな意味があったと感じている。

プロジェクト名：

ニューノーマル時代の商品アイデア提案

連携先：株式会社ツバメックス、サンスター株式会社

実施期間：令和2年11月1日～令和3年1月31日

プロジェクト主査：斎藤 和彦（プロダクトデザイン学科 教授）

プロジェクト副査：金澤 孝和（プロダクトデザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：プロダクトデザイン学科4年 片山 結夢、3年 五十嵐 千恵、牛澤 吏里流、大重 亘輝、河口 楓菜、本橋 真美、守田 愛梨（7名）

1. プロジェクト概要

このプロジェクトは、株式会社ツバメックスから依頼を受け、グループ企業母体のサンスター株式会社とも連携した受託研究である。

提案についてはサンスター株式会社の商品群を念頭に「With CORONA」の新生活様式及び、プラスチック削減の両視点から、さらにツバメックスの技術的得意分野を視野に、生活者が日常的に使用する商品において、長岡造形大学が持つプロダクトデザインに関する知見及び学生たちの柔軟且つ斬新な発想によりニューノーマル時代の商品アイデア提案を創出し、新たな商品の開発に繋げることを目指した。

以下の提案にも取り組むこととした。

- ・生活習慣づけとしてこれまで気づかなかった使用方法や容器の提案
- ・携帯性の視点からの新しい使用方法と容器の提案
- ・樹脂材料削減の視点からの提案
- ・消毒、感染防止、防疫視点での生活上使用する新たな消費提案

2. スケジュール

- コロナ禍であることから遠隔での指導、打合せ、発表となった。
- 10月20日（火）参加志望メンバーへのガイダンス（Zoomにて）
- 10月30日（金）製品サンプル受取・確認
- 11月2日（月）プロジェクトスタート
- 11月24日（火）学内アイデアチェック／企業紹介（Zoomにて）
- 12月7日（月）中間発表プレゼンテーション（Zoomにて）
- 12月28日（月）最終発表プレゼンテーション（Zoomにて）
- 1月21日（金）報告書打合せ（Zoomにて）
- 1月29日（金）報告書提出

3. 実施状況

- ガイダンス

発注企業を知るためのガイダンスを行い、遠隔による企業説明や製品説明やサンプルの提供を受け、どんな企業・業容であるかを理解するとことからこのプロジェクトは始まった。当初、本学もしくはNaDeC BASEでのキックオフや意見交

換会、工場見学・現場視察についても申し出もあったが、コロナ禍ということからこれを断念せざるを得なかった。そのためこれまでの産学連携のプロジェクト進行とは異なる、コロナ禍での方法を索しながら進める事となった。

- 考察

発想の段階では両社の業容についての制限は一旦外し、コロナ禍で自分自身が不便に思うこと・気になること・こうあって欲しいことなどを見つめ直し、世の中の動向や人々のマイノリティなど幅広く調査することでコンセプトを絞っていった。

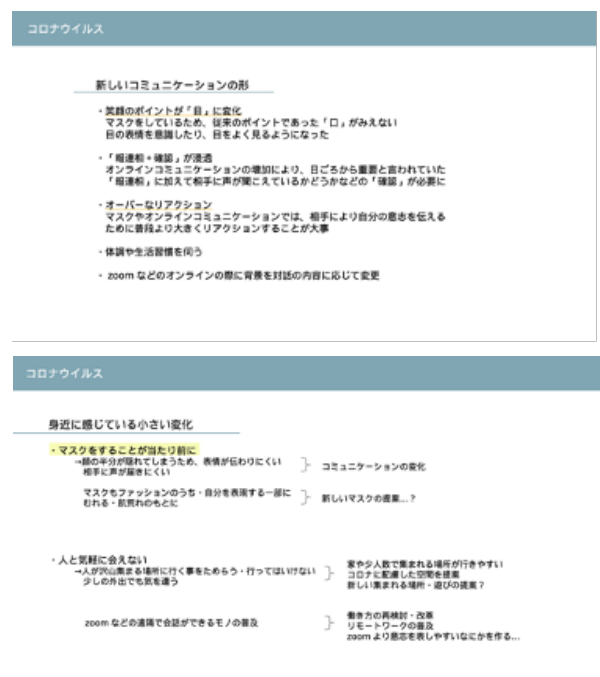
- 中間発表

発表はZoomによる遠隔で行い、メンバー個々に提案の着眼点・コンセプトを中心にパワーポイントやPDF資料にまとめ、画面共有しながら発表するという形式で進めた。最初にコロナ禍における生活様式の変化についての「調査まとめ」を行い、その後それぞれの提案を発表するという流れで進めた。

発表内容に対し出席者からのアドバイスをいただき、その内容を検討し最終提案に結びつけるというプロセスで進めた。

- 最終発表

中間と同様に遠隔によるプレゼンテーションを行い、製品化を視野にいたれた質疑応答ののち発表資料を成果として納品した。これを受け、今後製品化に向けて社内での検討を進めることとなった。



4. 提案

プロジェクトメンバーの学生7名からの最終発表での提案は下記の21件となった。また中間発表時から削除されたもののなかにもアイデアの種として検討の余地があると考えられるため参考資料として提出した。最終発表の提案は下記の通りである。(タイトルのみの表記)

＜コロナ禍リサーチ＞

0. コロナで変わっていく社会・自身の生活

＜手指消毒に関する提案＞

1. カプセル・タブレット型の消毒

2. シャボン玉消毒器

3. ピンポイント消毒液ボトル

4. アルコール消毒ボトル

＜ディスペンサーに関する提案＞

5. どこでも消毒+触れると抗菌

6. 蓋型ディスペンサー

7. あったか消毒ジェルディスペンサー

＜歯磨きに関する提案＞

8. 外出時の歯列矯正用歯ブラシ、コップ

9.10 秒歯磨き

10. 歯磨き粉チューブクリップ

11. 歯磨き粉チューブ収納

＜マスクに関する提案＞

12. マスクを洗うボトルとボール

13. マスクスタンド

14. バイカーズマスク

＜その他＞

15. トイレットペーパーホルダー

16. リモートワーク向け簡易レフ板

17. 脚が邪魔にならないカメラスタンド

18. Web カメラ緩帳

19. リモート用画面トリミングツール

20. 映画館内間引き座席用カバンフック

21. 飲料・ポップコーンホルダー

5. まとめ

大学の授業の開始が1ヶ月半遅れ、遠隔というこれまでとは全く異なる授業形態への急激な移行など、新型コロナウイルスの感染拡大により学生自身の生活も大きく変化した一年であった。そんな環境下でそれぞれが日々の行動やウイルスに対する意識が、どのような提案に結びついていくのか、大変に興味深いプロジェクトとなった。

当初計画していた対面前提での進行が、断念せざるをえなくなり、教員も初めての全遠隔対応で、手探りで進行した。特に現場見学の機会がもてなかったことや、飲食を伴うディスカッションなど、アイスブレイクする時間が持てなかったことは残念であった。

一方、大学に送られたサンプル品を、遠隔で説明してもらう取り組みは、学生もリラックスした環境で、友人と理解したことを共有しながら聴くことができていた。対面では、どうしても受け身姿勢や遠慮がちになるので、産学連携における効果的な遠隔の活用方法として参考になる経験であった。現場での調査に制約があった分、新型コロナの情報収集に力を入れたようで、特に中間発表で現状を詳しく提示している。

今回、最終的に21のアイデアが成果として提示されているが、実はその裏にも、若い学生たちがどのような目線で情報収集をして、それをもって着想したイシューやプロセスはどうだったのか、ということにも我々が気づかなかったヒントが沢山隠れていると感じている。デザイナーとしてはまだ生まれてもいない卵の学生提案は、即商品化は難しいが新しい可能性を感じてもらえるのではないかなと思っている。

その他にも、SNS ネイティブの彼らがリアルコミュニケーションをより大切に感じるようになった。通学や美容など時間の使い方に大きな変化があり、実は自由な時間が増えたと感じた。家族との関係の変化。友人との関係の悪化。既存のマスメディアに頼らないとされるZ世代が、新型コロナの情報収集のために既存メディア報道に興味を持ち始めた。映画館の入場制限が逆に快適な空間になる。等々、概念を別ステージにシフトできそうなイシューが多くある。是非21の提案と合わせてご検討願いたい。

末筆になるが、全遠隔のプロジェクト進行に合わせ、細かい段取りや情報共有、データでの丁寧なコメントバックなど、学生のためになる多くのサポートをいただき、ツバメックス様、サンスター様にはこの場を借りて感謝申し上げたい。

家でリラックス/リフレッシュできない

切り替えをうまく促す

- ・うまくリラックス出来ないのは、リモートワークなどの作業と、休むこととの切り替えがうまくいっていないからではないか
- ・なやみに作業を続けている事も原因かも

歯磨きをする事が気持ちの切り替えにつながっている体験談。
でも沢山歯磨きをする事で、
歯のエナメル質が削れているのではないかと
抵抗感や不安感が溜っていた

- 10秒歯磨き

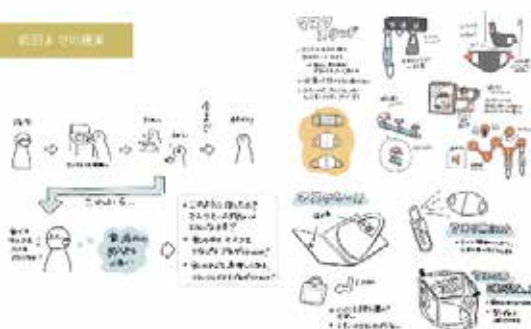
気持ちをスッキリさせるためにする歯磨き
新しい歯磨きのカタチ

口の中の唾液分泌への刺激や
冷たい水を含むこと
手を動かすことなどから
気持ちのリフレッシュ・切り替えを促す

- ・歯を磨く事が目的ではないため、短い時間ですむ
- ・ヘッドは柔らかく目？ブラシは必要ない？
- ・歯磨き粉がモチモチ泡立ったら楽しい？
- ・口に入れていて気持ちがいい
- ・歯磨き粉の質感も大切、ひんやり感あってもいいかも
- ・ブラシ自体の形も変える必要があるか
- ・粉に含まれる研磨剤もいらない
- ・歯には優しい、切欠替と歯磨きセットの提案



- ・ヘッドは柔らか目？ブラシも必要ない？
- ・口に入れていて気持ちがいい
- ・ブラシ自体の形も変える必要があるが
- ・歯には優しい 切り替え歯磨きセットの提案



- ①凹凸のあるボール
- ・柔らかい素材（ゴムなど）
 - ・直径80mm程度
- 2つの紐をひっかける

スラの相をひっかけるのみ

スラの相をひっかけるのみ



▼マスクを巻く



- ②ボトル
- ・透明
 - ・①のボールが入る大きさ
 - ・ひっかけられるような紐があってもいいかもしれません

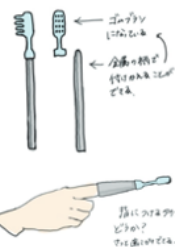
あってもいいかもしれません

あってもいいかもしれません

あってもいいかもしれません



歯ブラシの形



-
- Figure 1 shows ten different types of toothbrushes, each with a label in Chinese:
- 1. 普通牙刷 (Ordinary toothbrush)
 - 2. 电动牙刷 (Electric toothbrush)
 - 3. 儿童牙刷 (Children's toothbrush)
 - 4. 牙周牙刷 (Periodontal toothbrush)
 - 5. 舌苔牙刷 (Tongue scraper toothbrush)
 - 6. 牙缝刷 (Interdental brush)
 - 7. 电动牙刷 (Electric toothbrush)
 - 8. 儿童牙刷 (Children's toothbrush)
 - 9. 牙周牙刷 (Periodontal toothbrush)
 - 10. 舌苔牙刷 (Tongue scraper toothbrush)

歯や歯茎にダメージを受けないように、シリコンゴムや
細い柔らかい毛質のものを使う？
いつもの歯磨きと違う感触や刺激が欲しい
歯を磨くことを目的とせず、
短時間でスッキリできるようにしたい。ヘッドの密度は必要ない？

歯や歯茎にダメージを受けないように、シリコンゴムや
細い柔らかい毛質のものを使う？
いつもの歯磨きと違う感触や刺激が欲しい
歯を磨くことを目的とせず、
短時間でスッキリできるようにしたい。ヘッドの密度は必要ない？

歯や歯茎にダメージを受けないように、シリコンゴムや
細い柔らかい毛質のものを使う？
いつもの歯磨きと違う感触や刺激が欲しい
歯を磨くことを目的とせず、
短時間でスッキリできるようにしたい。ヘッドの密度は必要ない？

歯磨き粉の形

素早く歯磨きできるように、リフレッシュするために
ペースト状の歯磨き粉でいいの??



プロジェクト名：

旧機那サフラン酒製造本舗しつらいに関するクレド制作業務

連携先：長岡市都市計画課

実施期間：令和3年1月15日～令和3年2月28日

プロジェクト主査：金澤 孝和（プロダクトデザイン学科 准教授）

1. プロジェクト概要

本プロジェクトは、醸造のまち摂田屋に立地する旧機那サフラン酒製造本舗（約9,000平米）での事業展開に伴い、敷地内に現存する貴重な歴史的建造物群の趣を尊重し、統一感のある場所となるように、しつらいに関するクレドの制作を本学に依頼されたものである。連携先は長岡市都市計画課であるが、実際にクレドを活用するのは当該地に関わる関係者全員となる。

2. 実施状況

旧機那サフラン酒製造本舗の関係者に対してヒアリングを行い、その結果を精査してクレドを制作した。具体的なヒアリング内容に関しては、公表をしないという約束で聞かせてもらった経緯もあり、ここでは記さない。なお、クレドという言葉がわかりづらいということで、完成形では「みちしるべ」ということになっている。

旧機那サフラン酒本舗
しつらいに関する
みちしるべ

001 (2176) 0000000000

PHILOSOPHY

哲学

PHILOSOPHY

醸造・発酵文化の残るまち・摂田屋の魅力を次世代に引き継ぐ。

先人たちが地域に残してくれた、様々な貴重な文化財を次世代に引き継いでいくことが求められています。しかし、それは単純に古いものを保存していく作業ではありません。他地域の類似事例をトレースしてもうまくいくとは限りません。

独創的な感性を存分に発揮して人々を驚かせてきたであろう、機那サフラン酒本舗の創業者吉澤仁太郎は、既存の価値観にとらわれることなく、新しい取り組みを許容した歴史をつくり、その独特な世界観や哲学を残してくれています。

建築物や庭園、残された備品、生活用品などカタチあるものだけにとどまらない、その貴重な文化遺伝子ともいえる資産をどのように扱い、次世代へ引き継いでいくかを考えていく必要があります。

みちしるべ

みちしるべ

次世代へも誇れる引き継ぎが伝達しないように、これからも吉澤仁太郎のような新しいものごとを具現化するイノベーターが生まれて活躍できるように、都度意識を確認するための「みちしるべ」が必要だと考えました。

もともとの地の持つ高いポテンシャルに気が付き、多くの方々がそれを最大化する取り組みを行ってきました。また、これからは様々なアイデアが生まれてきます。過去をリスペクトすること、そして未来でリスペクトされるべく、現在は何をするべきなのか？

みちしるべは、この地に関わる全ての人が拠り所となる信条や価値観、行動指針などを表現した文言です。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHY

なぜ、残すのか。
なぜ、新しくするのか。

全ての取り組みに関して、その問いに対する解答と理由がきちんと語れるようになっていなければいけません。正解はないかもしれませんが、しかし、最適解・納得解となる条件設定は都度必要で、残すのも、新しくするのも説明責任を負う必要があります。未来に向けて必要な解答を導き出す過程。そこが重要になります。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHO

船頭多くして
船、山登る

地域を想う方々が知恵を出し、最適解に導くことはとても重要です。しかしそれぞれが自分のオールを持ち、方向も加減も揃わないと、船は行き先を見失います。漕ぐ前に情報の共有が必要です。そして例えば美味しい果実を求めて船を漕ぎ出すと考えるのであれば、その果実のなる枝葉も、幹も、根も、土も、そして森もみるべきです。豊かな森が山にあれば、船が山に登るのも最適解になります。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHO

近者悦

遠者来

近き者よろこび、遠き者来る（論語）

地域における日常生活の質（QOL）が豊かで、暮らしを楽しんでいる姿があれば、それに惹かれて遠方から訪問者がやってきます。生活の質を高めることと、訪問者の満足度を調和させることを目指します。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHO

老若男女だれしも

だけど

ジェネレーションやジェンダーを超えたマルチターゲットが求められます。しかし、ターゲット設定が絞り込めていないと全ての行動で迷いやブレにつながります。そこで、しつらいに関することは、設定を「幼児とその親」とします。新鮮さを必要としながら、流行を求めすぎず、良い意味でコンサバティブ。安全性への配慮などの基準にもなります。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHEN

伝えなければ

伝わらない

立場の違う多くの人に関わるため、ナレッジマネジメントが成果に直結します。情報・知識・経験の共有は当たり前として、そのスピード感も必要です。知りたい情報にアクセスできない状況や、個々のスキルに依存した暗黙知で共有ができない状況は、パフォーマンスに大きく影響します。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHEN

できあがった時がピークではない

最初につくるときにピークになっていなくても、立案者・運用者・生活者が色々と関わって発酵が進む、という考え方を許容します。時間のかかる発酵もあります。しかし成り行きに任せて放置はせず、都度ビジョンを見直し共有することが必要です。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHAT

地と図の関係

「図」となるランドマークを生かし、その間に存在する「地」の魅力を考えます。神は細部に宿るといいますが、ミクロ的な視点だけではいけません。地域全体を視野に入れたマクロ的な視点も必要です。歴史的なものごを尊重して、大事にしなければならない見せ方が必要である一方、好奇心を刺激する新しい取り組みが共存する多様性も重要です。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHAT

多様性を認める

多様性が重要ということは論を俟ちません。しかし、それを「認める」と「受け入れる」は違います。多くの人が認めていても、受け入れて実行するかどうかは別になります。すべてを受け入れることはできません。その判断には調整を要し、必要に応じて専門家にお願いしなければなりません。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

WHERE

結果的にグローバル

まずはローカルです。地域の特性、特色を生かしたローカルな考え方をベースに、他地域と比較をします。するとあたりまえとなっているローカルが、実はグローバルな視点では興味深かったり、唯一無二であったり、逆に近隣との類似性や関連性などが新たな取り組みにつながるかもしれません。それらの結果、グローバルになっているのが理想です。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

HOW

そもそも素材。

手を加えないという面制図もあります。顔面や装飾は個性を表現できますが、本来の個性を見えづらくもします。地域にはまだ潜在している素材がたくさん眠っています。多少見覚えがなくても、多少パフォーマンスが低くても、エシカルな視点を待てば、そもそも素材が生きて来ります。

WHY
WHO
WHEN
WHAT
WHERE
HOW

プロジェクト名：

令和 2 年度歴史的建造物総合調査業務委託

連携先：三条市

実施期間：令和 3 年 3 月 15 日～令和 3 年 3 月 31 日

プロジェクト主査：平山 育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤 哉子（研究員）

1. はじめに

三条市から長岡造形大学へ、歴史的建造物としての価値を明らかにし、文化財保護の基礎資料を整備することを目的として調査の依頼があった。

対象は、三条市固有の歴史を物語る「工場」を記録・保存し、活用につなげる調査と、歴史的建造物についての基礎的調査である。

2. 「工場」の調査

2-1 調査の概要

・調査方法

三条市に所在する鍛冶などの工場に赴いて現地で、聞き取り調査を作成し、外観及び内部において写真撮影を行った。

・調査物件

三条鍛冶道場の協力を得て、三条市内における特徴的で歴史的な業者の紹介を受けた後、工場の建物調査を進めた。

本年度は、刃物 3 件、木鋏 1 件の工場について歴史的建造物の観点から調査を実施した。この内 2 件が昭和戦前期に溯り、1 件が昭和戦後期の高度経済成長期、もう 1 件が昭和時代末期の建築であった。従来の調査も含めると、三条におけるもの作りの足跡をたどることができる。今後、精密調査などを行い、この地における独自の歴史を記録として残す必要性を痛感した。

2-2 調査の内容

・義平刃物 三条市一ノ門 2 丁目

義兵刃物は、大正 10(1921)年に 2 代前が創業したという。現在の建物には昭和 8(1933)年に移転して、現在に至り、主に刃物類でも庖丁の製作を行う。

建物は木造平屋造、切妻造妻入の形式で、小屋組は洋小屋組のキングポストトラスを用い、屋根はセメント瓦葺とする。



義平刃物



涌井パール刃物



吉金刃物製作所



鶴巻刃物

※所属等はプロジェクト当時のもの

規模は梁行3間に桁行8間半として、奥の桁行2間半程が早い時期の増築と判断できる。建物は昭和戦前期に溯るもので、当時の工場の様子をよく伝えるものとなっている。

室内の軒高は高く、ここに動力を各機械に伝えるプーリーなどの装置も存置される。工場には、コークス炉、カナ床、スプリングハンマー、ボール盤、プレス、研磨機などの機器類が配置される。

・涌井パール刃物 三条市一ノ門2丁目

涌井パール刃物は、先々代がこの地において昭和5(1930)年に創業したものという。現在、製品としてパール、庖丁、土器箸の製作を行う。建物の規模は梁行2間半、桁行7間程とする。

建物は木造平屋建、切妻造平入のセメント瓦葺とするものである。建物はもともと馬小屋であったものを昭和5(1930)年の段階で改造を行い、今日に至るものと判断できる。そのため現在では梁下に追加材を配した改造が行われている。

工場内にはガス炉、スプリングハンマー、プレス、研磨機、ボール盤、グラインダー、ガラスビーズブラストなどが配される。

・吉金刃物製作所 三条市金子新田丙

吉金刃物製作所は、明治27(1894)年に初代が三条市島田にて創立した。金子新田の工業団地には平成15(2003)年に移転したが、工場の建物自体は昭和50(1975)年位の建築とする。建物は鉄骨造2階建の工業製品の波形スレート板葺とする。建物は梁行6間、桁行24間の1棟を工場ごとに区切り桁行10間、切妻造平入の形式で、刃物類、庖丁の製造を行う。

工場内にはガス炉、エアハンマー、プレス、スプリングハンマー、半自動研磨機、グラインダー、ステンレスブラストなどが配される。

・鶴巻刃物 三条市林町2丁目

鶴巻刃物は、昭和60(1985)年に、自宅敷地内において先代が創業したものである。なお、研ぎの工程のみ、金子新田に工場を配している。製品は園芸用の鋏類が中心となる。

工場の建物は昭和60(1985)年の建築で、昭和64(1989)年頃に増築を行っている。

工場は鉄骨造2階建、切妻造妻入、波形スレート板葺とする。規模は当初の建物が梁行4間半、桁行12間程で、こ

れに通路2間程を挟み、梁行3間、桁行10間半程の増築分、物置となる。

工場内にはエアハンマー、プレス、グラインダー、ショットブラスト、バレル研磨機、焼戻炉、焼入炉などが配される。

3. 本成寺 三十番神堂

・沿革

法華宗本成寺は寺泊に生まれた日印に由来する寺院である。

法華宗は日蓮を宗祖とし、直弟子である日朗を初祖として孫弟子にあたる日印が本成寺を開創した。日印は比叡山、鎌倉等で修行の後、永仁5(1297)年、越後に青蓮華寺を開き、正和2(1313)年になってこれを長久山本成寺と改め、現在の場所に寺地を改めたという。

伽藍は創立以後、文安(1444～1448)年間、天文20(1551)年、宝暦8(1758)年、明治26(1893)年の4回に渡って火災に遭っており、現在、伽藍に残る建物の大半は宝暦もしくは明治の火災以後の建築に関わるものである。

伽藍は、天明6(1786)年に建築なされた山門(新潟県指定文化財)をはじめ、本堂、客殿、庫裏、多宝塔、鐘楼堂、水門、太鼓門、黒門、千仏堂、三十番神堂等から構成され、山門と黒門までの間に山内寺院が配置され、更に山門前は通りを挟んで農家が建ち並んでいる。

・建物の概要

伽藍は五十嵐川左岸の信濃川との合流点に間近い平坦地に位置する。かつて寺域は伽藍を中心に東西400m、南北700m程が囲い土手と呼ばれる土盛で囲まれ、東側の土手には戦前期、桜が植えられ名所とされていた。囲い土手の内側は寺と山門門前に並ぶ住宅以外、田圃であったという。

本成寺は山門が南限で、これを潜ると両側に山内寺院が並ぶ。突き当たりが水門で、この内部が堀と水路で区画された中心伽藍となっている。一方、三条駅に至る東側からの通りもあり、この東限には黒門が配される。黒門の内側にはやはり両側に山内寺院が連なり、弁天堂、千仏堂、三十番神堂なども傍らに配されている。突き当たりが太鼓門で、これを潜ると中心伽藍となる。

中心伽藍は南面し、北側に寄って中央に本堂が配され、その背面に真骨塔を置く。本堂西側には寂光殿、客殿、奥書院、庫裏等が配され、東側に多宝塔、鐘楼堂が置かれる。

中心伽藍の東側の境林内に位置する番神堂は南面するもの

で、いわゆる拝殿、幣殿、覆殿の権現造の形式で宮殿を覆殿に納める。規模は拝殿部分が正面柱間5間で12.6m、側面柱間3間6.3mで、正面に1間の向拝が取り付く。幣殿は間口1間で4.3m、奥行3間4.8m、覆殿は正面3間5.2m、奥行4間6.4mとなる。また、宮殿は正面間口1間で2.1m、奥行1間で1.8m、向拝の出は1.6mとなる。形式は拝殿が入母屋造平入で金属板葺、正面向拝は唐破風付とする。幣殿は切妻造金属板葺、覆殿は流造で金属板葺とする。宮殿は一間社流造の形式でこけら葺とする。

・平面

拝殿：拝殿は入母屋造平入の形式で正面桁行5間、奥行3間の規模を持ち、柱間は桁行中央間が14尺、両脇間は7尺2間となる。室内は1室で、中央の正面側が10帖で、畳寄を介し拝殿背面の1間と幣殿正面側の1間と一続きとなる畳敷で、柵により囲まれた一段高い一画と、両脇の12帖からなり、周囲に縁は設けない。正面の柱間はいずれも板戸とする。奥の中央間寄りの柱間は棚、外側の柱間は棧を立てた花頭窓、両側面中央間は引き違いの板戸とする。なお、中央間一両脇間境の独立柱及び中央間背面の両脇の柱はご平形となる。正面に階6級を置く。

幣殿：拝殿中央間背面に接続し、間口1間、奥行3間となる。正面側1間が拝殿中央間に続く10帖で、階2段で背面2間をモルタル叩き土間として、四半敷様の目地を刻む。両側面背面2間にガラス戸を設け、柱は0.5尺角程となる。

覆殿：正面3間、奥行4間で、正面側半間に、幣殿のモルタル叩き土間が延びる。階3段で宮殿とし、宮殿の周囲は叩き土間となる。両側面正面1間目にガラス窓を開ける。

宮殿：一間社流造の形式で、身舎正面7.03尺、側面6尺、向拝の出は5.3尺とする。身舎は正面は双折戸で内部は前後2室に別れ、部屋境を開戸とする。奥は5段の棚とする。身舎3方に縁を廻し階は5級で浜縁、浜床とする。

・構造

拝殿：拝殿周囲はコンクリート叩き土間、建物下は叩き土間とする。礎石は切石で、柱は角柱でこれを足元貫、内法貫、内法長押で固め、桁を受ける。組物は三斗組で拳鼻、中備は墓股とし、二軒繁垂木、妻飾は二重虹梁に大瓶束とする。向拝は、水引虹梁上に配した組物が唐破風の菖蒲桁を受け、二重虹梁で大瓶束、笈形とし、身舎側の妻は渦紋の浮彫とする。小屋組は和小屋組で屋根は金属板葺とする。

幣殿：コンクリート製布基礎上に土台を廻し、柱を立てる。腰貫などで固め桁を受ける。一軒疎垂木、屋根は金属板葺とする。

覆殿：コンクリート製基壇に葛石を配し土台を巡らして柱を立てる。柱を貫で固め桁を受ける。屋根は金属板葺で、外部は腰高さまで豎板張、それ以上は下見板張とする。

宮殿：切石基壇に切石礎石を配し、土台を据えて柱を立てる。切目貫、切目長押、内法貫、内法長押で固め、組物は三手先組物で、中備は墓股、妻飾は二重虹梁大瓶束で笈形とする。縁は腰組で3方に配し背面に脇障子を設ける。向拝は水引虹梁で固め、組物は連三斗組。中備は詰組と墓股とする。屋根はこけら葺である。

・建築年代

拝殿：三十番神像の一部は、元禄15(1702)年の年紀を持ち、棟札も元禄15(1701)年に溯るものが存在するものの、現状の建物は彫刻絵様からこの時代まで遡るとは言えない。なお、小屋組からは番付が見出された。正面側筋が「か」、背面側筋が「ち」であったため、背面には「い」から「と」となる3間半程度に及ぶ建物、即ち現状と同規模程度の覆殿を想定できる。一方、後述するように宮殿内部には天明元(1881)年の棟札が残されており、こちらの年代が彫刻絵様には近い。そのため拝殿の建築は宝暦8(1758)年の火災後、18世紀後期に行われたと判断する。

幣殿：当初は幣殿が存在しなかったことになる。現在、幣殿に見られる前机などは大正時代の記載をもつことから、この時期の遠忌などに併せ、建築がなされたと判断できる。

覆殿：現在の覆殿は最近のものである。但し、当初の覆殿は現状の拝殿と同時期からあったことが、拝殿の番付から判明したため、当初は、拝殿に直接、覆殿が接続していたと考える。なお、覆殿の旧部材からは安永10、天明元(1881)年の銘が見出されている。

宮殿：宮殿内部には天明元(1881)年の棟札が存置され、これが建物の建築年代を示すと考えることができる。

・建物の復原

拝殿：当初は中央間の奥2間が内陣の扱いで、1段高い床面と判断できる。当初、正面は中央間のみ建具で両脇間は板壁に復される。また、側面の板戸、背面の窓、棚も板壁に復される。なお、小屋組は棟札より、昭和51(1976)年に当初の茅葺から現状の金属板葺に改められた。

覆殿：覆殿の改修に併せ、サッシ窓とされた。

・まとめ

本成寺三十番神堂は、元禄15(1702)年頃に前身神像の作成及び建物の建築があり、宝暦8(1758)年の火災後、現状の拝殿、宮殿、前身の覆殿の建築が天明元(1881)年にあった。以後、大正時代頃の遠忌に併せ幣殿の改築があり、現状で見る平面形式に整ったと考える。

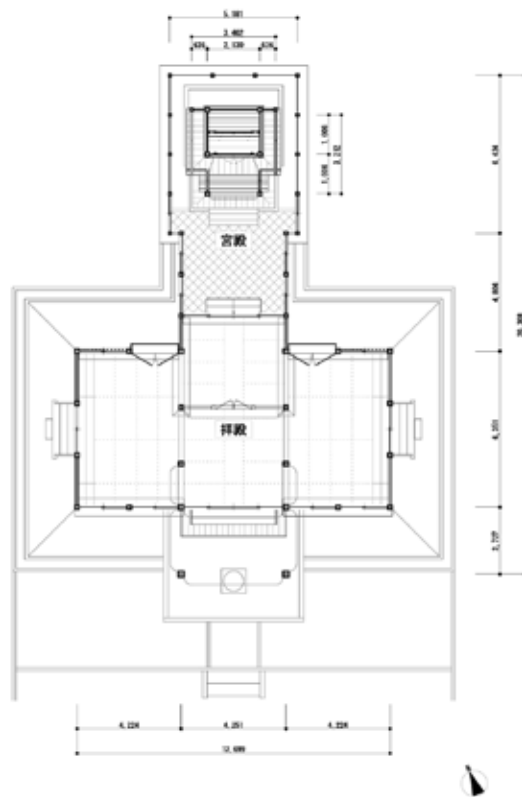
この三十番神堂は、比較的規模も大きく明治の火災をかくぐった建物として貴重である。



三十番神堂 正面 正面 南より



三十番神堂 宮殿 正面 南より



三十番神堂 平面図



三十番神堂 天明元(1871)年 棟札

知的財産の管理・活用

長岡造形大学では教職員や学生が創出した知的財産を保護・管理・活用する活動に取り組んでいます。

教員主体のデザイン研究開発、地域協創演習といった地域の課題解決に学生が取り組む授業などで知的財産が創出されるケースがあります。いずれも創出された知的財産を大学が適切に管理し、商品化して販売するようなケースでは利活用について契約の締結を行っています。

1. 大看板に戻った力士

長岡市機那サフラン酒本舗の大看板修復について描いた絵本で、学生が発案・制作しました。



2. えちごトキめき鉄道外観デザインからの活用

イベント兼用列車の外観デザインについて本学学生2人のデザインが採用されました。

開業記念グッズとして車両の外観がスポーツタオルと、サポプレート（列車行先表示板）を模したプレートに活用されました。



3. 村上のふるさと本「むム」

本学と村上市観光協会で立ち上げた「村上広域観光ブランディング・デザイン研究会」によって発行され、本学が企画・制作した「むム m むらかみのごくごくふつうのくらしをならべてみました／第1弾」と「むム m むらかみのいいところってなんだろう／第2弾」が発売されました。（第1弾：平成27年5月発売／第2弾：平成29年3月発売）

また、第11回新潟アートディレクターズクラブ公開審査会にて第2弾冊子がADC賞とブック・エディトリアル部門賞を受賞しました。（平成29年7月）



地域協創演習

地域協創演習は、地域社会及び企業と本学教員・学生が互いに協力し、新たな知的価値、地域価値、企業価値の創出を目指す演習授業です。

学生との協創を希望する地域や企業の方からの相談を受け、学生にとって教育効果が高いと判断した場合に授業として対応しています。授業内で教員による指導のもと、学生がデザインを通して様々な課題解決や新たな価値創造に取り組んでいます。



カカシプロジェクト

期 間：令和 2 年 5 月～10 月
 担当教員：境野 広志（プロダクトデザイン学科 教授）
 履修者数：58 人

目的

農村、棚田の景観を向上させる独創的なカカシを創作し、実際の地で設置することで、地域の活性化や学生の社会性を涵養する。活動の過程では創作だけでなく地域の方々と深く交流し、農作業や農村維持作業への参加も行う。

テーマ

棚田に「農民のとも」となるカカシを作る。制作後、実際に棚田に設置し、写真撮影してパネルにまとめる。また実際の集落の人との交流も行う。

実施状況及び成果

コロナ禍の影響で、前期は遠隔でできる内容に授業を変更、前期は 4 年生及び希望の 3 年を対象とし、全て遠隔で課題説明、制作チェック及びプレゼンテーションまとめを行い、プリントアウトした作品を地域で回覧、アンケートを行い学生にフィードバックした。
 後期は工房の使用が可能となったため希望者には実制作をさせ、稲刈り後ではあったが現地に設置し、地域との交流会を行った。



電子決済の UI/UX 提案

期 間：令和 2 年 7 月～12 月
 担当教員：真壁 友（視覚デザイン学科 准教授）
 履修者数：16 人

目的

2030 年の近未来でどのような買い物体験が可能になるのか、現在の技術の延長線から考え、新しい体験を提案する。

テーマ

多様化する買い物体験の未来のカタチをデザインする。ネットショッピングで買った品物のリアル店舗での受け取り、レジのない無人店舗での買い物などは既に実現している。2030 年にどのような買い物があるのか、授業を通じて検討する。

実施状況及び成果

オリエンテーションのレクチャーの中で、決済のインフラを提供する株式会社トランザクション・メディア・ネットワークスの協力のもと、現在のネットショッピングの流れや最新の技術についての講義を行なった。授業の着地点は、2030 年の買い物体験に関して店舗そのもの、商品、来店から退店までの一連の接客体験をグループで検討し、プレゼンテーションを作成し発表した。



長岡ものづくり紹介冊子

期 間：令和2年5月～令和3年1月
 担当教員：山本 敦（視覚デザイン学科 教授）
 履修者数：8人

目的

長岡の「ものづくり」をPRすることで、多くの市民に地元の産業や企業を知ってもらい、学生の地元企業への就職や、将来ものづくりへの道へ進む子供たちが増加すること等を目的に冊子を制作する。

テーマ

長岡ものづくり企業への取材を実施し、各企業のことを理解した上で、小・中学生に向けてわかりやすく伝達する構成力・表現力・文章力を身につける。

実施状況及び成果

今回、長岡ものづくり冊子で紹介するのは、中野かな製作所、株式会社東京ロストワックス工業、北越コーポレーション株式会社、ヨネックス株式会社、CS 合同会社の5社。コロナ禍の中なので、企業への取材以外はリモートの授業となった。最初に、表紙のデザイン案を各自で考え、市役所内でアンケートを取り、1案を採用決定。その後ページ構成を検討し、企業紹介ページ、目次・扉ページ、学生コメントページを各々でデザインをし、どのデザインで行くかを検討した。9月の3日間、3グループに分かれて取材・撮影を行った。その後各ページの担当者が、コピーライティング・デザイン・DTP作業を行なった。校正を数回行った後、12月に印刷入稿。2月に納品となった。



farm miel project

期 間：令和2年5月～令和3年1月
 担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 助教）
 履修者数：3人

目的

- ・第1段階：現地調査や、住民との交流を通じて観光商品に発展する地域資源を発掘する。
- ・第2段階：第1段階の結果をもとにプロトタイプを製作し、連携先に提案する。

テーマ

ラオスの伝統的な暮らしの中から、新しい観光商品となり得る地域資源を地元住民らと発掘し、カタチにすることを通じて、開発途上国の現状を理解するとともに国際協力に必要なノウハウや、商品化に必要な知見を深める。

実施状況及び成果

東南アジアの中で最貧困国とされるラオスの不発弾汚染地域であるシェンクアン県において、シェンクアン県文化観光局の協力を得ながら、そこに暮らす人々の伝統的な暮らしや生活の知恵を活かした環境商品の開発やそのPRにつながるような企画を考えた。当初は、現地での調査や情報共有を経てアイデアを企画する予定であったが、コロナウイルス感染症の拡大によって現地への渡航は中止せざるを得ず、履修者各自で情報収集を行い、それらの情報からシェンクアン県の地域資源を活用した商品開発や地域復興につながるような企画を考え、英語でまとめたものをシェンクアン文化観光局の担当者に渡した。履修者らが考えた企画内容は、2021年度より実施されるJICA 草の根事業でも実施することが決まり、今後は、課外活動として、次年度以降に実施していくための準備や調整などを行うことになった。



長岡発酵プロモーション

期 間：令和 2 年 5 月～令和 3 年 2 月
 担当教員：板垣 順平（大学院造形研究科 助教）
 履修者数：11 人

目的

- ・第 1 段階：長岡市内の発酵食品や発酵文化についての調査を行い、「発酵×デザイン」についてのアイデア出しを行う。
- ・第 2 段階：第一段階の結果をもとに、自ら考えた「発酵×デザイン」に関するイベントの企画・実施やアウトプットを制作する。

テーマ

デザインの切り口で「発酵」というものを捉え、ワークショップや発酵をテーマにしたイベントなどに参画し、新たな「発酵×デザイン」についての知見を深める。

実施状況及び成果

長岡の発酵を PR することを目的としたチームが 2 つ、長岡のふるさと納税を PR することを目的としたチームが 1 つの計 3 チームに分かれて、各チームで長岡市シティプロモーション課や市内の醸造会社の協力を得ながら実施計画や実施内容を組み立てる内容であった。前期は、シティプロモーション課のコーディネートによって、柳醸造株式会社や有限会社新潟農産、中川酒造株式会社などへの見学やインタビューを実施した。後期は、これまでに収集した情報から、各チームで以下のような取り組みを考え、試行した。

- ①長岡の発酵 PR チーム A…長岡の特産品である味噌を PR するために、柳醸造の協力を得ながら、贈り物としての味噌のパッケージを考案し、HAKKO trip にてワークショップを実施
- ②長岡の発酵 PR チーム B…長岡市内にある新潟農産のかぐらなんばん醤油と塩麴のパッケージとブランディング提案
- ③ふるさと納税 PR チーム…長岡市のふるさと納税の返礼品の味噌を PR するための HP 用のイラストや写真素材をシティプロモーション課に提供

文具館タキザワ長岡店 NID 販売構築

期 間：令和 2 年 10 月～令和 3 年 1 月
 担当教員：金澤 孝和（プロダクトデザイン学科 准教授）
 履修者数：13 人

目的

- ・実際の現場での観察や調査を体験し、それを整理する力を養う。
- ・顧客価値を意識した、シーズ整理、マーケティング、商品企画、開発、販売など実務での流れを経験する。

文具館タキザワ長岡店に売り場スペースをもらい、運営方法を含めた企画を考える。学生目線でのセレクション、必要かつ実現可能であれば新商品開発、それらの VMD 構築を一貫して提案する。

テーマ

「グローバル」

考え方はグローバル。視点は地域。

実施状況及び成果

当初テーマ設定は、学生たちの調査と考察から導こうと考えていた。しかし、コロナウイルスの影響で開講期間が短くなったため、運営側で「グローバル」という設定を最初から決めてスタートした。

極力対面でのコミュニケーションを避け、その代替えツールとして SLACK を活用することにした。情報を全員で共有することができ、それぞれのコンセプト検討段階から、株式会社滝沢印刷・文具館タキザワのスタッフと学生、教員が協創することができた。LINE での個別フォローも効果的に機能したと感じている。提案は、多学科学年の学生が参加してくれた甲斐ありバリエーションに富んだものとなった。（長岡牧野家まで遡って調べ考えられた内装設えから、プロモーション PV、新商品提案など）

最終プレゼンテーション後、それぞれの提案は、具現化可否の判断をされて、多くの提案が実現を目指して現在進行形で動いている。

水場のデザイン

期 間：令和 2 年 8 月～11 月

担当教員：主担当：土田 知也（プロダクトデザイン学科 教授）

担当：津村 泰範（建築・環境デザイン学科 准教授）

履修者数：19 人

目的

建築と水回り設備において世界的な企業である株式会社 LIXIL から、現役のデザイナー招いて「地域の公共施設」を対象として、プロダクトと建築の学生によりプロジェクトを行う。様々なレベルの協創を実現させることを目的とする。

テーマ

「Next Public」

これからの公共のあり方を探求し、長岡市周辺のフィールドワークから建築物の将来像を創造して、その空間における公共トイレの提案を行う。

実施状況及び成果

LIXIL からは毎週、担当デザイナー二人（内 1 人が本学 OB）が来学し土田、津村と共に指導にあたった。

学生は大学の課題との両立に苦労しながらも頑張ってくれた。建築・環境デザインとプロダクトデザインと複数の領域の学生が参加したことで提案は多様性に富み、建築設計、内部空間のデザイン、機器のデザイン、またトイレ利用を学ぶアプリのデザインなど多岐にわたった。授業終了後 LIXIL 関係者からも、予想以上との感想をいただいた。

プレゼンテーションには担当部長も来学し、さらに LIXIL 東京本社と名古屋支社のデザイナーと Zoom で結び、3 拠点で遠隔対面併用で授業を行った。

ボランティア実習

ボランティア実習は、奉仕（ボランティア）精神を実社会で実現し、日頃修練している知見・技術を社会に還元する経験を積むことをテーマにした授業です。

【リフレット】

プロトタイプ (約 60mm×85mm 広げると約 240mm×85mm)



プロトタイプの素材は再生色の和紙。デクステラを置かなくてもレトロで優美な風合いになった。

摂田屋こへび隊

期 間：令和 2 年 5 月～ 9 月

担当教員：主担当：渡邊 誠介（建築・環境デザイン学科 教授）

担当：津村 泰範（建築・環境デザイン学科 准教授）

履修者数：41 人

目的

長岡市の醸造の町摂田屋地区のまちづくり支援活動をボランティア活動を自主的に行うことでサポートする。

テーマ

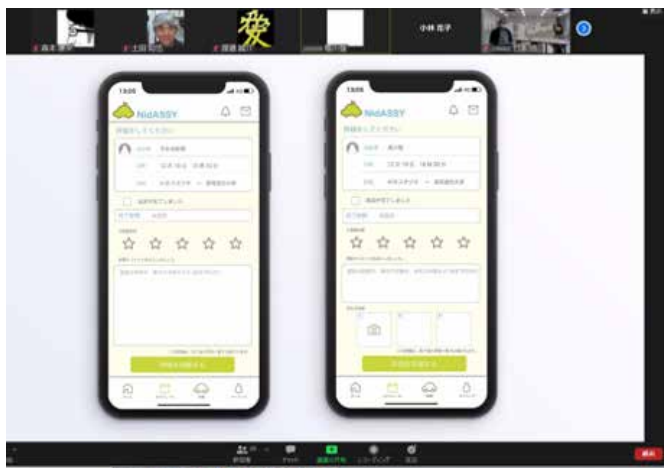
コロナ禍以前の企画では現地での自主的ボランティア活動であったが、コロナ禍の元大幅にテーマを変更し、①オンラインによる現地調査、現地情報収集により、②摂田屋地区をPR、周知する企画を作り実施する、に変更した。

実施状況及び成果

全部で 15 チームの作品の提出があった。グッズの制作だけでなく動画、ポスター、企画立案などバラエティに富む成果が得られた。

地域特別プロジェクト演習

地域特別プロジェクト演習は、様々な領域の大学院生がチームを組み、地域が抱える実課題をテーマにプロジェクトとしての組み立て、フィールド調査、解決にいたるまでのプロセスを一体的に学び、新たな価値創造に取り組む演習授業です。



壊して気づくイノベーション

期 間：令和2年5月～令和3年1月

担当教員：主担当：板垣 順平（大学院造形研究科 助教）

担当：森本 康平（大学院造形研究科 助教）

履修者数：5人

目的

長岡をフィールドとして、チームとして取り組むべき内容を企画・立案し、実践を通してプロジェクトメイキングやグループダイナミクスに必要な能力を修得する。

テーマ

身近な生活環境から不具合であるにもかかわらず、その状態が維持されているモノやコトなど、壊すべき対象を見つけ出し、俯瞰的な視点でその対象の壊すべき理由や目的を見出した上で、破壊につながるアクションを通じて、対象の本質や存在意義についての理解を深化させる。

実施状況及び成果

大学院生たちは、まず、「自宅にポスティングされるチラシ」や「Facebookのいいね機能」、「電化製品の多種類のアダプター」、大学から駅までの交通手段」など、日常生活の中から不具合であるにもかかわらず、その状態が維持され続けているものを各自で見つけ出し、これらの情報をKJ法によって整理した。最終的には、「長岡造形大学の学生の視点から見た地方都市の自動車社会の不便さ」を壊すべき対象として定め、破壊に繋がるアクションとして、友達にアッシーを頼む感覚で車保持者と非保持者を結びつける仕組みとして、「NidASSY（ナッシー）」を提案した。このサービスは、スマートフォンのアプリによって、需要（どこかに行きたいけど車なくて困っている）と供給（車を持っていて時間に余裕がある）を結び付けると共に、車保持者が一方的に負担を負うとしないために、アッシー感覚で依頼しちょっと嬉しいお礼がもらえるような仕掛けを提案した。また、コロナ禍による多くの制約がありながらも、実際にLINEを使いながらこの仕組みの試験運用や検証後のアンケート調査を行いながら、学生の新しい交通手段としての可能性を示した。



特殊印刷メディアとしての版画

期 間：令和2年10月～令和3年1月

担当教員：主担当：岡谷 敦魚（美術・工芸学科 准教授）

担当：小松 佳代子（大学院造形研究科 教授）

履修者数：3人

目的

版画技法は、現在の印刷技術の元になった技術であり、同じ原理を使った印刷手法は現在も主流の印刷技術である。長岡の有限会社カンダプロセス様と協働で版画の手業を使ったサンプル作品が、印刷物としての可能性を生むのかデザイナーと共に検証する。そこでのブレインストーミングの後、作品制作と考察を行いその価値を検証する。

テーマ

このプロジェクトでは、版画の複数性を生かし、特殊印刷術としての版画の役割と意義を検証する。

実施状況及び成果

PBLの過程

1. 版画を刷ったことのない学生に対し、技術指導を行い、自身の今までの研究と版画との関係についてのディスカッションを行う。
2. 版画は、印刷技術の元になった技術であるのにも関わらず、産業としての印刷業と版画の交流はほとんどない。企業がどのような技術を持っているのか、また、版画界で独自に発展した技術はどのようにうつるのか、をシルク印刷企業とディスカッションを行った。
3. 企業の意見としては、早く・簡単に・安く・いろんな素材に印刷することが第一義的に考えていることがあった。それを踏まえつつ、版画の技術を産業として生かす方法がないか、作品を制作しながら検討した。
4. 企業の意見だけでなく、デザイナーなど立場の違う方の意見も聞く。学生からは以下の作品の提案をする。
 - a) はがきの形状をした作品の提案
 - b) 油彩に活版で鳥の足跡を押しつけた作品の提案
 - c) 新聞や雑誌などの印刷物に、シルクスクリーンで質感のあるインクを重ねて刷る作品の提案
5. デザイナーからは、クライアントの要望があれば小ロットの印刷物としての価値はあると評価していただいた。しかし、依然として印刷物を、綺麗に、早く、安く、簡単に印刷する必要があることが示された。
6. 学内で発表



Arts-Based Research

期 間：令和 2 年 9 月～令和 3 年 1 月

担当教員：小松 佳代子（大学院造形研究科 教授）

履修者数：5 人

目的

自らの制作実践過程における思考や探究を省察し、それを他者に開示する方途について考察することによって、修士論文・博士論文における研究の基盤をつくる。

テーマ

科学研究とは異なり、芸術制作に根拠づけられた研究のあり方を創造する。実践の中で探究を深めることによって知が生成するような、実践と研究との往還をすること。成果物よりも研究のプロセスにおいて自らの実践と探究を省察することを重視する。

実施状況及び成果

修士課程 1 年生 2 人、博士後期課程 1 年生 3 人がそれぞれ自己の制作過程における思考や探究、あるいは自らが企画・実施したワークショップの企画から振り返りまでの経緯を開示する方法を考え、1 月 27 日の最終発表会の際に、展示および発表を行った。

この発表に至るまでの間、3 回集まって制作過程を開示するとはどういうことかについて議論し、それぞれの作業の進捗状況の中間報告を行いつつ進めた。以下のような展示がなされた。

- 1) 制作しているときに考えていることを文章にして紙に書いてそれを封筒に入れ封をしたうえで、鍵のかかるポストに入れる。見る人は鍵を開けてポストから取り出し、封筒を破ればその中身を見ることができる。
- 2) 自己が制作しているときに書いているメモやドローイングなどを透明のビニールに転写し、それを積層して展示。
- 3) 自己の制作途上の作品写真や思考の経緯、集めた資料、ドローイングや材料の領収書など、あらゆるものを記録して一望できるようにし、作品と共に展示。
- 4) 二人の大学院生で企画した子ども園でのワークショップの準備から当日の実践、その後の振り返りまでの経緯とそこでの考察を一つのパネルとして表示。
- 5) デジタルで制作している画面と制作している自分自身を録画し、それを動画にして、試作の経緯が表示されるようにした映像とテキスト。

その他の地域社会の連携

2018 年度 6 月からスタートした NaDeC 構想は、2019 年度から長岡崇徳大学が加わり、4 大学 1 高専、長岡商工会議所、長岡市の 7 団体の体制となりました。

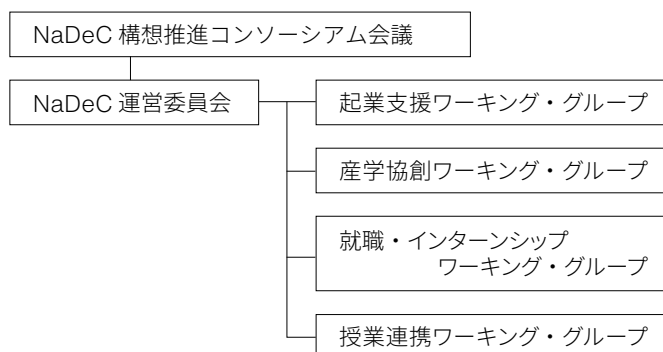
また、これまでの NaDeC 構想推進コンソーシアム会議、NaDeC 運営委員会の他、新たに 4 つのワーキング・グループを設置することでより具体的な連携事業の検討・実施を進めています。

今後は中心市街地に米百俵プレイス西館（2023 年度）、東館（2025 年度）のオープンがそれぞれ予定されており、そこでの本格的な活動に向けた準備の体制がいよいよ整いました。

NaDeC 構成団体

- ・長岡技術科学大学
- ・長岡商工会議所
- ・長岡大学
- ・長岡市
- ・長岡崇徳大学
- ・長岡工業高等専門学校
- ・長岡造形大学

NaDeC の推進体制



教育・研究の場としての NaDeC BASE – その①

〔地域と工芸デザイン（大学院授業）〕



産学交流拠点としての NaDeC BASE

〔本田技術研究所 × 長岡造形大学 特別企画〕



教育・研究の場としての NaDeC BASE – その②

〔プロダクトデザイン演習Ⅰ（学部授業）〕



ワーキング・グループ活動の一環としての相互見学会

〔長岡造形大学 卒業・修了研究展〕



長岡芸術工事中 2020



日 時：令和 2 年 11 月 7 日（土）・8 日（日）、12 月 26 日（土）・27 日（日）、令和 3 年 2 月 13 日（土）

主 催：長岡悠久ライオンズクラブ、長岡造形大学

共 催：長岡市、ながおか・若者・しごと機構

後 援：長岡商工会議所、長岡市大手通商店街振興組合、新潟日報社、朝日新聞新潟総局、毎日新聞新潟支局、
読売新聞新潟支局、産経新聞新潟支局、長岡新聞社、栃尾タイムス社、共同通信社新潟支局、時事通信社新潟支局、
NHK 新潟放送局、BSN 新潟放送、NST 新潟総合テレビ、TeNY テレビ新潟、UX 新潟テレビ 21、NCT、
エフエムラジオ新潟、FM ながおか 80.7

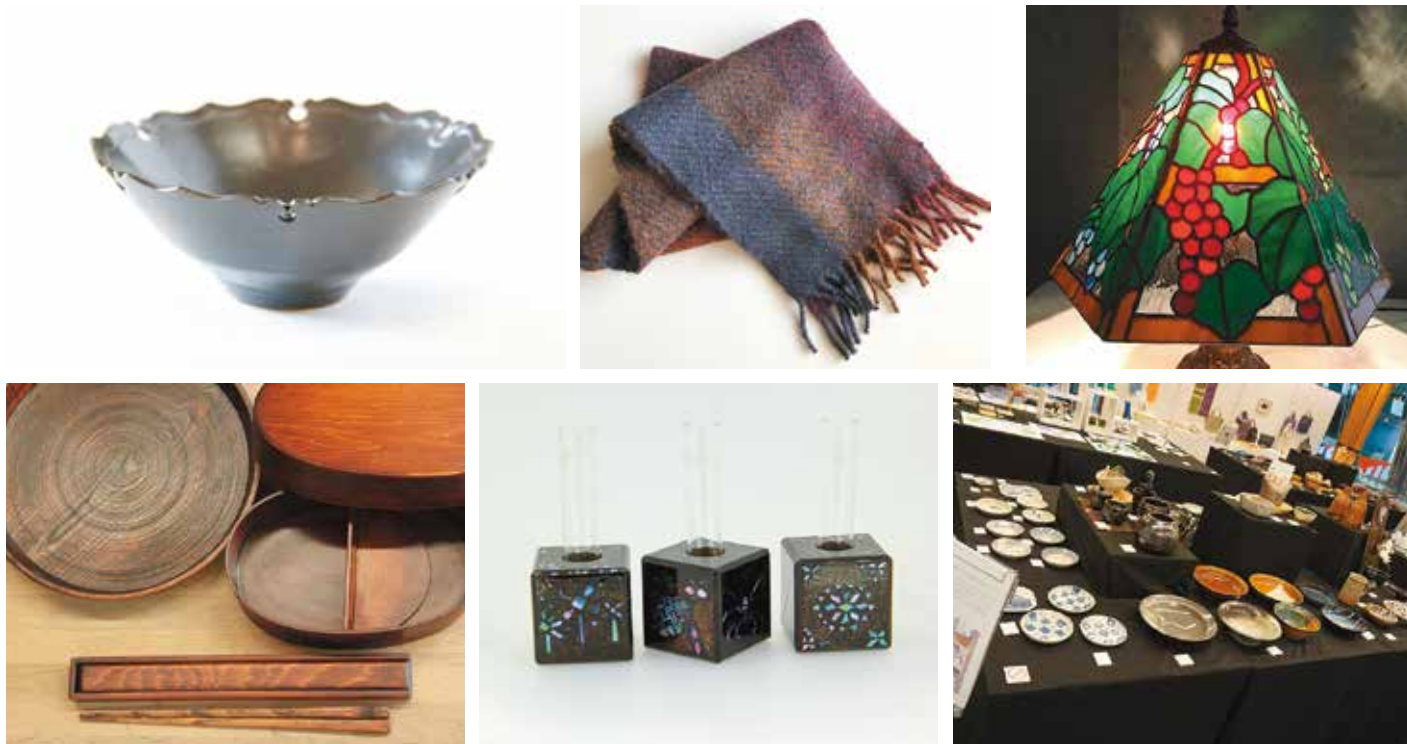
運 営：ヤングアート長岡実行委員会『長岡芸術工事中 2020』

長岡悠久ライオンズクラブや長岡市の協力を得て、本学学生による実行委員会が、在校生や卒業生、地域で活動する大人と共にプロジェクトを企画し、一般公開されるイベントです。

7 回目となる今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から初めてオンラインで実施しました。街中に少しずつ増えてきたアトリエ、スタジオ、工房、シェアハウス、展示や交流、仕事の場所などとして運営されるオルタナティブ・スペースなどの様々な「拠点」をオンラインでつなぎ、配信するツアーを展開しました。また、ゲストアーティストとのトークや、ワークショップも行い、これまでの長岡芸術工事中の取り組みを冊子およびウェブサイトでまとめました。

市民の生涯学習・ 文化活動の支援

市民工房



「ものづくり」を通して市民と大学がつながり、大学をより身近に感じてもらう取り組みとして、また、文化あふれる新潟県の実現を目指して、平成 22 年春に市民向けの工房を開設しました。実施する講座は 4 期に分かれており、受講する方の興味と経験値に合わせてコースを選択できます。

令和元年度はガラス・陶芸・染織・漆芸・木工の 5 講座 70 コースでのべ 577 名の方が受講されました。12 月には

アオーレ長岡で第 7 回目となる「市民工房展」を開催し、多くの皆様に作品を見ていただきました。

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からすべての講座を中止しましたが、代替企画として「市民工房講師作品展」を開催し、講師陣の作品を展示、紹介しました。3 日間で 290 人が来場し、併せて大学ホームページにて作品展の様子を公開しました。

こどもものづくり大学校



「まなび」と「あそび」の観点から、ものづくりを通して豊かな感性と創造力を育むことを目的に、小学生を対象とした「こどもものづくり大学校」を平成 23 年より開講しています。

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点か



らすべての講座を中止しましたが、代替企画として、Zoom を使用したデジタル工作講座「こどもものづくり大学校オンライン講座」を実施し、小学生 17 人が参加しました。Zoom の機能により学生スタッフと小学生が交流する講座を実現することができました。

長岡造形大学美術・デザイン勉強会

長岡造形大学
造形図法を学ぼう

13:30~16:00
講 師：倉澤 隆雄（造形デザイン科准教授）
定 員：15名
参加費：500円
参加者：高校生・大学生・社会人
※専攻で学ぶ図法を授業で見るととても面白いです！講師が説明するとさらに面白くなるので一睹の価値があります。つまり是非にこの機会に体験してみたいものなんです！
※図法から造形図法まで幅広い図法を学ぶ機会も豊富です。

中学生・高校生対象

勉強会

長岡造形大学
美術・デザイン
2019

グラフィックデザイン講座
「こんな商品があったら面白い」をデザインしよう

13:30~16:00
講 師：佐々木 賢一（造形デザイン科准教授）
定 員：30名
参加費：500円
※身近な商品をもとにデザイン。「こんな商品があったら面白い」と思ったことと表現してみよう。みんなのアイデアでデザインしていき、このデザインを元に実際のデザインを通して、商品開発やマーケティングに役立てていきます。参加の人数は是非参加してください。

（例）「こんな商品があったら面白い」と思った商品や考えた商品などについて。



デジタルイラスト講座
デジタルイラストとモザイク技法で、映える動物をつくろう

13:30~16:00
講 師：佐々木 隆彦（プロダクション・イノベーション専攻准教授）
定 員：30名
参加費：500円
※動物のイラストをデジタルイラストやモザイクで表現しよう！デジタルイラストは絵の具や紙に描くよりも簡単に表現でき、色や大きさの調整も簡単です。このプログラミングで表現された動物は、動物園や動物のイラストとして活用したいところや、実際に動物のイラストとして活用したいところなど、様々な用途で活用することができます。



9/21*

※長岡造形大学・フリースクール2019（長岡）
中学生・高校生・社会人のみなさんを対象に、大学の学びの体験・設備を使って、動物・デザインを学ぶ機会を提供します。本学が実施する「フリースクール」を文化庁から認定するのを機会とし、動物・デザインを学ぶ機会を提供します！

申込方法 ホームページからお申込みください。 <https://www.nagaoka-u.ac.jp/biben2019/>
※参加費は当日徴収いたします。

申込締め切り 2019年9月12日（木）17:00まで ※定員に達し次第、受付を締め切ります

問い合わせ先 長岡造形大学 文化・広報課 〒940-0288 長岡市千代4-197
tel.0258-21-3321 fax.0258-21-3343
e-mail: bunkako@nagaoka-u.ac.jp

※申込先：長岡造形大学
〒940-0288 長岡市千代4-197
文化・広報課



中学生、高校生に対し、美術・デザインの高度な専門性を易しい手法で指導し、体験してもらうことで、美術・デザインに対する興味を深めてもらうことを目的に実施していま

す。長岡市の「熱中！感動！夢づくり教育」の事業に登録し、長岡市との連携事業にもなっています。

長岡市中学校美術部作品展



本学専門分野の入口で努力している長岡市内中学校美術部の部活動を支援することを目的に実施しています。コンクール形式としないことで自由に活動成果を発表できる場を提供しています。

特別講義・出張講義・実技講座



地域・市民の方々と大学の交流、地域発展への刺激になることを期待し、本学の各学科における特別講義を一般の方に公開しています。

また、地域からの依頼などに応じて、出張講義・実技講座なども行っています。

亀倉雄策賞受賞記念展覧会



亀倉雄策賞は1997年に急逝した亀倉雄策の生前の業績をたたえ、グラフィックデザイン界の発展に寄与することを目的として設立されたもので、運営と選考は公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会(JAGDA)が行い、毎年「Graphic Design in Japan」応募作品の中から、年間で最

も優れた作品に対して贈られています。

受賞作品および近作を集めた展覧会を開催し、会期中には受賞者による開催記念講演を行うなど、地域の方や学生から、世界に誇るグラフィックデザインの現在をご覧いただく機会としています。

まちなかキャンパス長岡



まちなかキャンパス長岡は、市民の方々の「学び」のニーズに応え、世代や地域を越えた交流をより盛んにすることを目的に、長岡市内の4大学1高専（長岡技術科学大学、長岡大学、長岡崇徳大学、長岡工業高等専門学校と本学）が長岡市と連携して企画運営しています。長岡駅前を拠点に、「まちなかカフェ」「まちなか大学」「まちなか大学院」「こども講座」など様々なテーマの講座をプロデュースし、各講座で

は4大学1高専の教員を始め、多くの方が講師を務めています。本学教員も専門分野の枠を超えて講座を行っています。

まちなかカフェ

- ・下を向いて歩こう！ーたまには座学でー
令和2年10月14日（水）
津村 泰範（建築・環境デザイン学科准教授）
- ・1冊の本ができるまで
令和2年12月10日（木）
天野 誠（視覚デザイン学科教授）

熱中！感動！夢づくり教育「夢づくり工房 in 長岡造形大学」



長岡市が取り組む「熱中！感動！夢づくり教育事業」の一環として「夢づくり工房 in 長岡造形大学」と題し、本学を会場としたものづくり講座を提供しました。

令和元年度も定員を大きく上回る応募となりました。2講座計4回を実施し、こどもたちは目を輝かせて真剣に取り組み、ものづくりの楽しさをたっぷり味わってくれました。



公立大学法人

長岡造形大学

Nagaoka Institute of Design

長岡造形大学 地域協創センター

〒940-2088 新潟県長岡市千秋4丁目197番地

Tel : 0258-21-3471 Fax : 0258-21-3343

E-mail : nid-rp@nagaoka-id.ac.jp



長岡造形大学 地域協創センター

<https://www.nagaoka-id.ac.jp/about/society/>



長岡造形大学 フェイスブック

<https://www.facebook.com/nagaoka.id/>



長岡造形大学 ツイッター

https://twitter.com/n_i_d